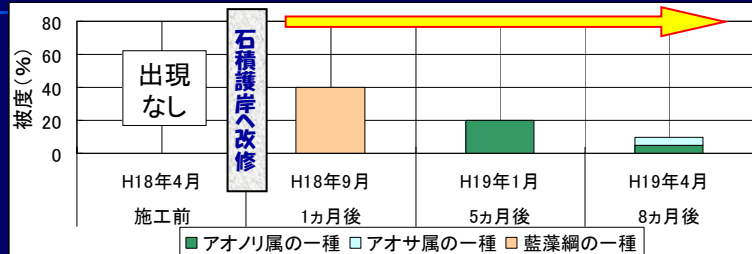


1工区における潮間帯植物の定着状況

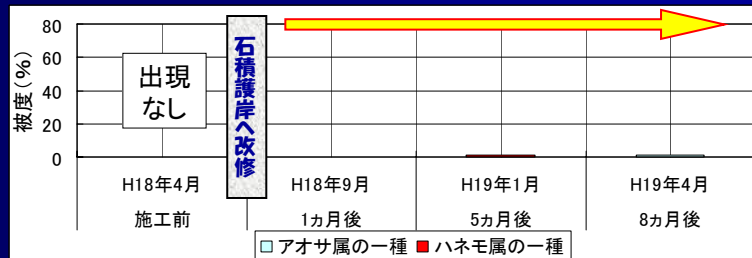
高潮帯

高潮帯は、施工前、施工後とも潮間帯植物はみられない。

中潮帯

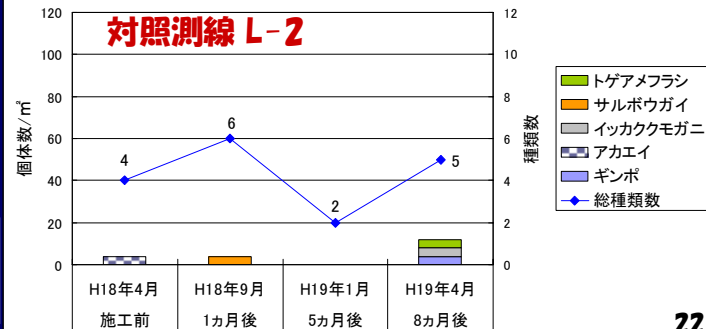
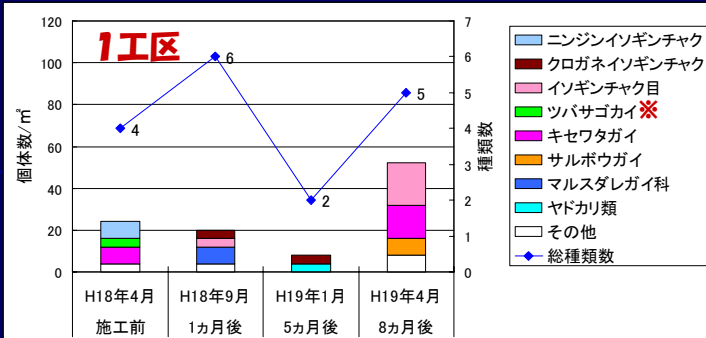


低潮帯



周辺部の状況①

濡筋底部
(60m地点)
における
底生動物

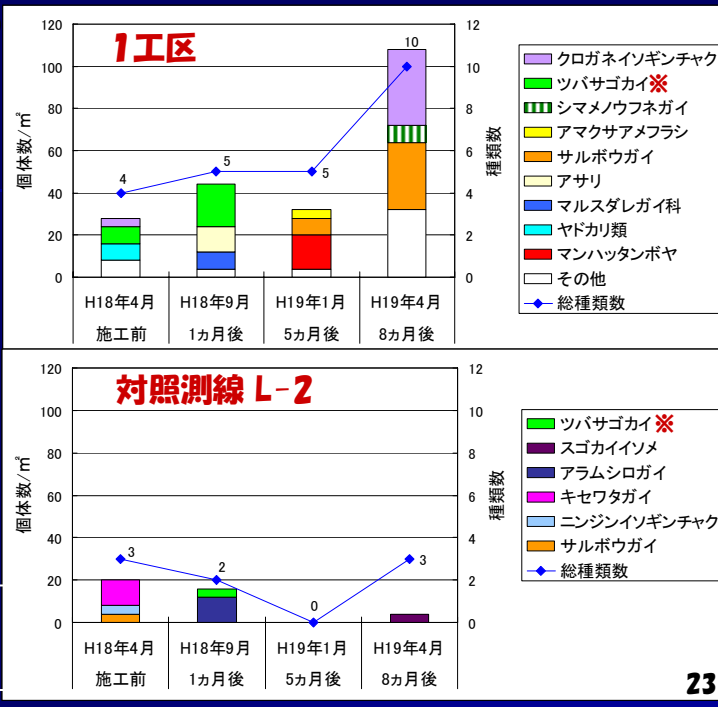


※正確な個体数が確認できないので、棲管の数で計上した。

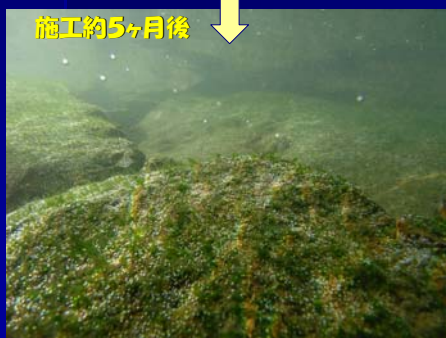
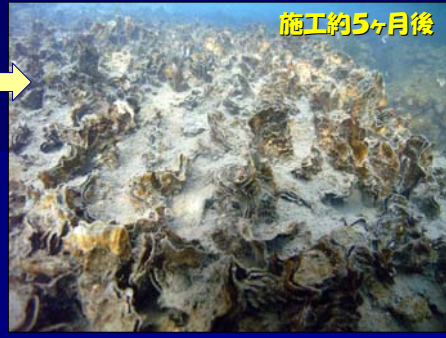
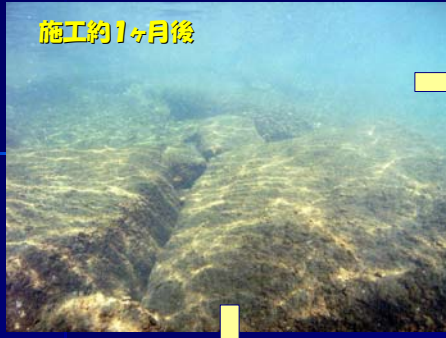
周辺部の状況②

100m地点
における
底生動物

※正確な個体数が確認できないので、棲管の数で計上した。



石積護岸のハビタットとしての機能形成



1. ハビタットとしての基盤の形成

① マガキの着生と増加

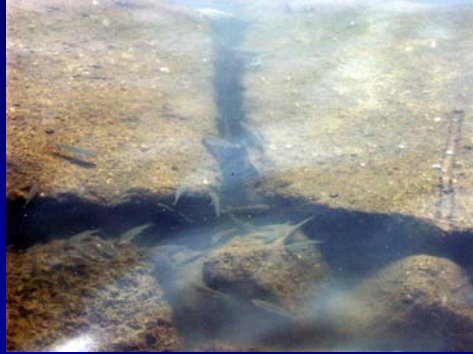
- 初期段階より着生。以降、着実に被度が増加。他の生物に生息空間を提供
- 施工後約1ヵ月で、中～低潮帯の被度は最大10%、約5ヵ月後には、マガキの被度は最大70%に達する。

② 藻類(アオリ属等)の着生

石積護岸のハビタットとしての機能形成

2. 餌場としての機能

- ポラやメジナ等の幼魚が餌場として利用（石積上の付着藻類を採餌）
- 幼稚魚にとっては、隠れ場としての機能も有している。
- ケフサイソガニ（雑食性）の利用



石積の付着藻類を採餌するポラの幼魚

施工後約11ヶ月:石積に集まるメジナの幼魚



石積護岸のハビタットとしての機能形成

3. 生息空間としての機能

- 石積の間にカキ殻、土粒子、擬糞等が堆積。
- ゴカイ類、イボニシ、アカニシ等の貝類が生息空間として利用
- ヤドカリ類やケフサイソガニ等の小型甲殻類が生息空間として利用



石積護岸のハビタットとしての機能形成の過程

4. 産卵場としての機能

中～低潮帯では、捨て石に付着したカキ殻をウミウシ類、貝類が産卵場として利用している。



ウミウシ類の卵塊：施工約8ヶ月後



カキ殻に産み付けられたイボニシの卵塊
施工約11ヶ月後